ツァーリ権力の瓦解（上）（注一）

（ごく普通の人々へ、ロシアの出来事に関して）

ヴラジーミル・コロレンコ（訳・村野克明）

イスラエルの会衆皆来りてレハベアム〔王〕に告て言けるは、

「汝の父、我儕の軛を難くせり。然ども、爾今、爾の父の難き役と、爾の父の我儕に蒙らせたる重き軛を、軽くせよ。然ば、我儕、爾に事へん」と。〔中略〕

〔レハベアム〕王荒々しく民に答へ〔中略〕彼等に告て言けるは、

「我父は爾等の軛を重くしたりしが、我は更に爾等の軛を重くせん。我父は鞭を以て爾等を懲したれども、我は蠍をもて爾等を懲さん」と。〔中略〕

是において民、王に答へて言けるは、

「我儕、ダビデの中に何の分あらんや。〔中略〕イスラエルよ、爾等の天幕に帰れ」と。〔中略〕

斯イスラエル、ダビデの家に背きて今日にいたる。

（『列王記略上』第一二章、三〜一〇）〔『舊新約聖書　引照附』、日本聖書協会、一九七七年、六四六〜六四七頁〕

Ⅰ　序

一九〇五〔明治三八〕年、民衆騒動の後、国会〔ドゥーマ〕召集の詔勅が発布された（注二）。

当時はまだ、私の面前には、新聞をほとんど読まず、読んでも内容を十分に理解できず、というごく普通の人々 простые люди がいて、しばしば、あの当時ロシア全土で起きていた出来事には、まったくの無理解でいたものだ。人民〔ナロード〕を捉えていたのは、ありとあらゆる、はっきりしない、誤った風聞の類い〔デマ〕ばかりで、どんな扇動家のあとをも付き従って行こうとする有りさまだった。巷では、すべての元凶は労働者にある、連中は日本人だか英国人だかに買収されているのだ、という噂で持ちきりだった〔一九〇五年は日露戦争の第二年目〕。

同時に、多くの人が、ごく普通の人々に向かって、起きた出来事の意味と、「一九〇五年一〇年一七月詔書」〔国会召集〕の意義（注三）とについて、説明しようと努めた。ツァーリ〔ロシア帝国皇帝ニコライ二世〕がこの「詔書」で約束した権利については、全国民の間で、その獲得のための大きな闘争が進行した。ある者らにはより早く、他の者たちにはより遅く、という進み具合だったが。もはや、一度「詔書」を拝命した以上、人民の誰一人として拒否しようとも、返上しようともしなかった。こうした約束事こそは「風に吹かせてはならない」、「（嘘を）吹き流しては」

は嵐〔革命〕をまねくぞ、と俗に言われたが、まさにその通りのプラウダ〔真実／正義〕となってしまった。というのも、ツァーリは約束を守ろうとせず、国難の際に、人民から選出された人たちと一緒になって統治したい、とは思わなかったからだ（注四）。その結果、彼は〔一九一七年〕二月二六日に国会を解散したが（注五）、数日後には自らの帝位を失う羽目に陥ったのである。

すると又しても、都市近郊の住民と、遠方の大小の村落やフートル〔南ロ・ウクライナの小村落〕の住民にとって〔一九一七年三月現在〕何が起きているのかさっぱりつかめない、という状態にある。彼らには、こうした出来事ははるか遠来の雷雨のようなものだ。ああ、どこかで雷が鳴っている、ああ、どこかで稲妻（いなずま）があかあかと燃え上がっては大地が震える、でおしまいなのである。

そして又もや、不安を呼び起こすような噂が発生している。わるい輩（やから）が毒ある言葉をささやき始めている。なぜなら、今度ばかりは「すべての責任は労働者あるいはユダヤ人にのみある」といった責任転嫁（てんか）はもはや困難だからだ。というのは、ツァーリ政府に対して今や誰も彼もが立ち上がったからである。将軍、将校、兵士、労働者、市民から、ツァーリ政府の役人までもが、そうなのだ。ペトログラードに続いてモスクワが動き出した。モスクワのあとは全土が続くだろう。約束を守らなかったツァーリは退位したが（注六）、ロシアの大地は残った。そして自らの手で自らの運命を握りつつある。

以下、私は、こうした出来事がいかにして、なにゆえに起きたのか、を語りたい。とはいえ、そもそもの始まりはもうずいぶんと以前のこと、わが国の過去にその根源が存する。したがって、簡略にとはいえ、過去を振り返らなければならない。

Ⅱ ■ロマノフ家、■ツァーリと民とを分かつ「土塁（どるい）」、■ピョートル大帝（注七）とアレクサンドル二世（注八）、■人民の期待、■ツァーリへの直訴人（じきそにん）

ロシアでリューリク朝が断絶してから三百年余が経過した〔リューリク朝は八七九年没のキエフ大公リューリクから一五九八年没のモスクワ大公国フョードル帝まで七百年ほど継続〕。

〔その直後の一六〇四年～一六一〇年の「動乱時代」には〕合法的なツァーリは存在しなかった。モスクワにはポーランド人が居座った。ロシアは当時〔「動乱時代」〕、彼らと戦争状態にあった。この時期、人民（ナロード）自身が国家防衛にも秩序回復にも務めざるを得なかった。人民義勇軍Народное ополчениеは敵に打ち勝ち、秩序確立のためにモスクワでゼムスキー・ソボル〔一種の身分制議会の「全国会議」〕が〔一六一三年二月に〕召集された。

人民の考えでは、当時スムータ〔動乱時代〕となったわけは、ただただ合法的なツァーリの家系が途絶えたからだった。〔僭称者の〕ツァーリらの交代と権力争いが始まった。そこで皆が考えたのは、ツァーリの権力が代々継承されしっかりと確立されていれば、万事うまく行くだろう、ということだった。だから〔一六一三年七月に〕ゼムスキー・ソボルがロマノフ家のミハイル・フョードロヴィチ（注九）をツァーリとして選んだのだ。それ以来、人民はもはや統治に干渉しなくなった。合法的なツァーリにすべてを期待したからである。

それから百年余りたった時、スウェーデンの外交官マリアン（注一〇）がロシアにやって来て次のように書いた。

「不満分子が社会（全体）でロシアほど多い国はない。ここでは人民の福利が統治者からちっとも配慮されず、貧者と弱者とは強者からごく野放図な迫害を受けている。両首都〔ペテルブルグとモスクワ〕にも帝国全土でも不満分子が数知れずいる。不平不満は近しい者同士の会話から聞こえてくるだけだが……。」

当時のロシアではアンナ・イオアンノヴナ〔注一一〕が統治していたが、実際は彼女の寵愛者любимец ビロン〔注一二〕が全面的に牛耳っていた。その統治は極度の残酷さと不公平さとで記憶されている。それに反対するどんな言葉であっても、嘆願の試み、あるいは単なる不平不満のつぶやきであっても、それらを発した人々は投獄され、拷問に掛けられ、極刑に処された。人民は飢餓に苦しみ、耐えて、沈黙を強いられた。

マリアンが言うには、この女帝は何も知らなかったし、最悪なことに、知ることを望まなかったし、また、知ることが出来なかった。「女帝のもとにはどんな嘆願書も届かなかった。身の回りを高い『土塁』вал で取り巻かれていたからだ。」

こう書いたのは一七三八年のことである。その時から長い年月が過ぎた。だが、この高い「土塁」は変わりなくロマノフ家の帝位を取り巻き、人民の声がツァーリの耳に届くのを邪魔してきた。このことは誰でも知っている。ロシアの作家たちはその点、多くを語ってきたが、ツァーリと人民との間にあるこの「土塁」のことを「障壁」средостение と名付けている。寵臣、寵愛者、側近、大臣、高級官吏、名門貴族のことである。

ロシア文学は力の限りこの連中と闘ってきた。偉大な詩人レールモントフ〔一八一四～一八四一年〕が書いている。

君たち、玉座のそばにうごめくケチな群衆よ、
自由、天才、栄光の死刑執行人どもよ！
君たちは法の庇護のもとに身を隠している。
君たちの前では、審判とプラウダ〔真実／正義〕さえもが、
だんまりを決め込んでいる始末だ、ああ！（注一三）

ごく普通の人々もまたこのことを知っており、ため息まじりに語ったものだ、「神様の所は高すぎる、ツァーリの所は遠すぎる」と。

しかしながらロシア人民は無学蒙昧の、純朴な民である。「タタールの軛」〔古ルーシ諸公国に対するキプチャク汗国の間接支配。一二三六年からの約二五〇年間〕によって、文明開化と国家発展とが長らく阻害されたからだ。他の諸民族のような代議制の組織もなかった。ツァーリの統治について自由に議論することもかなわず、その責任を問うこともなかった。

ロシアの民は自分らの歌謡のなかでツァーリのことを「親愛なる君主」Надёжа-Государь と呼んだ。常にこう期待していたのだ、「いつか、身の回りを囲む『土塁』を取り除こうとして、悪しき取り巻きどもを払いのけることに思い至り、全人民の声を聞くようなツァーリが現れるだろう。そうしたらロシアには幸福が訪れる」と。ツァーリの治世が交代するたびに、人民に、こうした期待がよみがえった、「ほら、今度こそ、新しいツァーリが、真の人民のツァーリとなるだろう」と。

しかし、ツァーリのプラウダ〔真実／正義〕へのこの夢想は、決まって裏切られた。新ツァーリもまた身の回りが同じ「土塁」に囲まれていることが判明するからだ。これまでの寵臣が新しい寵臣と交代しても、後者による統治は旧態依然のままだった。

もっとも、全ロシアが、無学蒙昧なロシアでさえもが、知っている名前がある。ピョートル大帝〔一六七二～一七二五年〕とアレクサンドル二世〔一八一八～一八八一年〕のことだ。

ピョートルにはわかっていた、ロシアはこれ以上長く無知蒙昧のままであってはならない、と。そしてその強力な腕でロシアを文明開化の方向へと動かした。アレクサンドル二世の名前の方は永遠に、農奴制の従属からの農民の解放と結び付いている〔注一四〕。

しかし、ピョートルは厳格で残酷な人間で、自己に容赦せず、自身の人民に対しても容赦しなかった。彼によって創建された首都〔ペテルブルグ〕の壮麗な建築群は数万人の人骨の上に聳えている。容赦なく国の津々浦々から建設現場へと駆り立てられた人々の骨である。概して、ピョートルは他国民に向かって国家としてのロシアを称賛し、文明開化の礎を築いた。だが、より多くの時を戦争に費やし、自身の人民のためには、実際のところ、大して貢献をしていなかった。

アレクサンドル二世の場合、治世の当初は、真の人民のツァーリだと思われた。農民を解放し、ロシアに新しい裁判所を与え、選挙制の〔県と郡の〕地方自治会〔ゼムストヴォ〕と市会の制度とを導入した。しかし彼はこの事業を完遂しなかった。地方自治会は偏った身分制的なものとなり、農民の代議員はごくわずかだった。一方、市会では大体、大きな屋敷所有者と商人とのみが議員となった。補足して言えば、そのあとになって、アレクサンドル自身が自分のやったことにあたかも驚愕したかのようだ

った。治世の後半から、自身の手で為した事業を軽視し過小評価し始めた。マリアンの言っていた「土塁」が、ロシアの作家たちが書いていた「障壁」が、すぐに、再び閉じられてしまった。最終的に「解放者としてのツァーリ」〔アレクサンドル二世〕は人民と分け隔てられたのである。

だが、人民はすぐにはこのことを信じなかった。前世紀〔一九世紀〕の七〇年代と八〇年代はじめのことを覚えている者は、当時どんなにたくさんの百姓〔ムジーク〕らがツァーリのもとへ請願に出向いていたか、を知っている。人民のなかには、自分たちを解放したツァーリへの信仰が生きていた。そのツァーリが永遠に人民と分け隔てられて「土塁」の向こうに隠れているとは、信じたくなかった。村落から、直訴人〔ホドキー〕が、ランプの炎に舞い踊る蛾の如く、あるいは灯台の明かりに飛び交う海鳥のように、夥しく群れをなして〔首都の〕ペテルブルグへと突進した。しかしツァーリの宮殿では門前払いを食らい、逮捕されては囚人護送団〔エタープ〕に組み込まれる、という始末だった。

私自身、青春時代、流刑中に、こうした流刑者、すなわち〔ツァーリへの〕直訴人である百姓たちに出会っている。そのうちの一人フョードル・ボグダン〔注一五〕はキエフ県ラドムィスリ郡〔コロレンコの生まれたジトーミル市から近く〕の農夫で、モスクワでの観閲式の際に巧妙にその場をすり抜けて、ツァーリ・アレクサンドル二世自身に対して自分の手で請願書を提出することに成功した。だが、何にもならなかった。ボグダンは流刑に処され、ヴャトカ県の森林へと駆り立てられた。彼はこう言った。

「わしが自分の村にいて土地を耕していた時には、こう思っていたものさ。よき人民〔ナロード〕がすべて家にいて安心して自分の仕事に従っている時には、監獄では馬鹿な連中 дурные люди ばかりが臭い飯を食っている、と。だけども、ツァーリのプラウダ〔真実／正義〕を信じてしまったばかりに、こうやって監獄と囚人護送団〔エタープ〕めぐりへと追いまくられてしまってからは、わしが思うに、今や、よき人民のすべては監獄と囚人護送団の中にと移っている、と。なんと多くのそうした人たちに出くわしたことだろう、百姓も、学生も、労働者も、地方自治庁〔ゼームスカヤ・ウプラーヴァ〕の或るメンバーも、みんな、居たものだ。彼らは、泥棒とかペテン師ではない、わしが泥棒とかペテン師でないように。全土がプラウダを望んでいる Вся земля хочет правды それだのに、又してもプラウダが隠されてしまったのは明らかなことだ。」

以上のように、もはやボグダンにツァーリへの信仰はなかった。この時、ほかに、同じような直訴人〔ホドキー〕五名が彼の話に耳を傾けていたが、その彼らも同様にこの信仰は失っていた。

総じて、当時、最良の人々のなかで、ロマノフ家の最良のツァーリ〔アレクサンドル二世〕との大きな不和 великая ссора が始まったのである。周知のように、アレクサンドル二世は残念な死を迎えた〔注一六〕。人民の間では、「地主たちがツァーリを殺害した。ツァーリが農奴〔クレポスヌィ

エ〕を取り上げたからだ」という噂が出回った。しかし、これは信じられない話〔ネ・プラウダ〕である。その治世の後半期、ツァーリは、かつて彼と一緒になって解放の事業に携わった文官のすべてを遠ざけた。彼らがツァーリに言明したからだ、改革を中途半端で終わらせてはならない、解放事業をさらに先へと推し進めなければならない、と。しかし、ツァーリには聞く耳はなく、解放運動の敵らを自らに近づけ、後者は全力をもって、できる限り、旧に復させるべく努めたのである。若い時から多くの良いことを為したツァーリだが、今や、部分的には彼自身の呼びかけによって解放に向かって前進し始めた偉大な人民の面前に、立ちふさがろうとした。よって、彼の事業を継続させようとする多くのよき人々を破滅させた。そして、自身が破滅したのである。

とにもかくにも、アレクサンドル二世は大きな事業を成し遂げた。治世後半期の大きな誤りにもかかわらず、彼の名前は〔以下の事業と機関とに〕永久に結びついている、すなわち、農民の解放と、新しい裁判所と、代議制の機関〔県・郡の地方自治会「ゼムストヴォ」〕と、市会〔ゴロツカヤ・ドゥーマ〕とに。

III ■アレクサンドル三世〔注一七〕、■「おかげで平穏無事に過ぎた」

息子の方は父親とは似ても似つかなかった。アレクサンドル三世〔一八四五年生。在位一八八一～一八九四年〕は一番ひどくてごく忌まわしい文官たち советники を自らの周りに侍(はべ)らせて、自身はガッチナ宮殿に閉じこもった。〔首都の〕ペテルブルグにさえもめったに姿を見せず、〔父親の〕アレクサンドル二世の改革でまだ残されていた良きもののすべてを大臣たちが根絶することを許した。すなわち、彼は、地方自治会〔ゼムストヴォ〕の農民選出議員の数を削減し、〔ゼムストヴォの議長として貴族の〕地方行政長官 земские начальники を導入し、新しい裁判制度を改悪し、かつての地主と貴族に人民の財産 народные деньги を分配した。農民へのおぞましき体罰を復活し、国民教育 народное образование への嫌悪を隠さなかった。報告書には自筆でこう書きこんでいる、「百姓が子供をギムナジウム〔ギリシア語・ラテン語を必修とする中学校〕に行かせるとは困ったことだ」と。そこで、国民教育省大臣ヂェリヤーノフ〔注一八〕は飛んでもない命令を発布した、ギムナジウムの幹部は生徒たちに以下のアンケートを実施すべし、いわく、両親は裕福であるか否か、よき住宅に住んでいるか否か、女中は幾人抱(かか)えているか否か、と。これは貧乏人の子供をギムナジウムから追いやり、「料理女 кухарка と百姓の子供」に門前払いを食わせるため、であった。ツァーリはこの命令を是とし、自筆で決済を下したのである。

人民の間では、このツァーリへの期待がすぐさま、萎(しぼ)んでしまった。

直訴人たちですら、もはや彼のもとへ到達しようとはしなかった。彼は人民に対して自分の宮殿の密閉した壁の向こうに身を隠し、貴族と廷臣の生活にのみ関心を示し、ロシア生活の最重要の出来事への無知と無理解とによって万人を驚かしたのである。

例えば、興味あることに、一八九一～一八九二年にロシアを大きな飢饉が襲った。ボリス・ゴドゥノフ時代〔注一九〕以来、経験したことのないほど深刻なものだった。すでに、それに先行する二年間が凶作だった。それは三年目も繰り返された。自著『飢饉の年に』В голодный год の中で私は、〔私への手紙の中での〕この恐ろしい災厄についての或る司祭の意見を紹介した。彼はこう書いていた。

「司祭として、福音書の真理の伝道者として、私は次のように言いたい、災難は尽きない идет беда за бедой と。畑の収穫は全滅。土塊の下の種子は朽ち、穀物庫は空っぽ、穀物は無し。家畜はうめき、倒れる。去勢牛は陰鬱に群れ、ヒツジは苦しむ。森から無数の木々が燃え、炎の壁と煙の柱が至る所に立ち昇る。（中略）〔旧約聖書の『ゼパニヤ書』の〕預言者ゼパニヤ〔ゼファニア〕〔注二〇〕の声が聞こえる、エホバ言いたまふ、われ、地の面よりすべての物をはらひのぞかん、われ、人と獣畜をほろぼし、空の鳥、海の魚〔および躓礙になる者と悪人と〕を滅さん、と。」

大臣たちはこの大きな災厄の隠匿と人民救出の拒否とに努めた〔注二一〕。だが、ゼムストヴォ〔県・郡の地方自治会〕の代議員たちが異口同音に声を挙げ始めた。だから、〔大臣たちも〕大きな国民的災厄を認めざるを得ず、食糧と播種とに巨額のルーブリを支出せざるを得なかった。しかしこれは遅きに失した。多くの人々が飢餓と病気で死んだのである。

飢餓に続いてコレラが到来した〔注二二〕。それはペルシアからやって来て、アストラハンを通ってわが国に入り込み、ヴォルガ川に沿って拡大し始めた。これに対して、県知事らはほぼ全くと言っていいほど無能な、「甘やかされっ子」ばかりだった。彼らが県知事に任命されたのは人民に奉仕するためではなく、人民に給料を支給するためだけであった。バクーの県知事はコレラからとんずらしてカフカス山中に籠った。サラトフの県知事は人民が動揺し始めるや、汽船の中に隠遁した。最悪なのは〔ヴォルガ川の河口の〕アストラハンの県知事の振る舞いである。彼は海上へ警備艇を派遣し、ペルシアとカフカス沿岸からやってくる汽船はすべてその進行を阻止し、ヴォルガ川に入れさせるな、という命令を発したのだ。しかしその際、県知事はそれらの船に対して真水もパンも支給しなかった。かくして海上には、健康な人と病人とを乗せた四〇〇隻以上の汽船と艀とが、せき止められたままとなった。病人は死に行き、健康な人は渇きと飢えに苦しんだ。助けは来なかった。ついに、ある日、アストラハンから汽船が一隻、現れた。皆、この船がパンと水を運んできたものと期待したが、近くにやってきてわかったが、なんと棺桶だけを運んできたのだ（※）。

（※）〔著者コロレンコの注〕この出来事のすべては私の論文『十二フィートの投錨地での検疫』を参照。

ここに現われているのは＞貴族の若様の県知事＜の無能さと＞愚劣さ＜ばかりだが〔注二三〕、しかし人民の中には、医者たちがわざと命令されて人々を苦しめているのだ、という確信が生まれた。とうとう、海上にかくも大量の船舶を押しとどめ置く可能性がなくなり、ヴォルガ川での航行を解禁にすると、船中でへとへとになった人々がヴォルガを川上へと押し寄せ、至る所で自分たちの受難の話をし、パンの代わりに棺桶をプレゼントされた話をした。当時、町から町へとコレラ一揆が襲い始めた。無知蒙昧な人民は、医者たちが最高当局 высшее начальство の命令で人民をわざと苦しめている、という悪意ある嘘っぱちを信じ込んだ。病院は襲われて焼き討ちに遭い、看護婦、准医師、医者はめった打ちにされた、彼らこそ自己の生命の危険をも省みず同じ人民のために粉骨砕身してきたのに。

その後、鎮圧が始まり、暴徒への軍事裁判となった。その際、サラトフだけでも二〇名以上が死刑に処せられた、暴徒をその行動に駆り立てたのはその無知蒙昧さのみによることだったのに……。また、軍事裁判では県知事たちの恥ずべき行為も明るみになり、そのことを最高当局 высшее начальство へと報告することが決定された。

こんなことがあった後でさえも、ツァーリは彼の腹心たちが有能であると認めていたようだ。ヴォルガ沿岸地方の県知事たちが裁判に付されることを全ロシアが期待していたのに、しばらくすると、驚いたことに、それとは真逆のツァーリの命令を全員が読むこととなった。山に逃げ込んだバクーの県知事も、コレラ一揆の原因となる措置をしたアストラハンの県知事も、そして、どうしようもない臆病者のように汽船に雲隠れして警察でさえかろうじて見つけ出せたというサラトフの県知事も、皆が皆、勲章を授与されたのだ。このことは、全国に次のことを明らかにしてみせた、すなわち、ツァーリを囲む「土塁」の前では、人民の静かな声の嘆願ばかりか、その大きな叫び声やうめき声でさえもが、跳ね返されてしまう、片やツァーリ自身は大臣たちの虚偽の報告書ばかりを読んでおり、それに基づいて行動している、ということである。

こうした出来事はまさにこの「暗黒時代」〔「沈滞した暗黒の反動期」と呼ばれたアレクサンドル三世の治世〕に起きたことで、アレクサンドル三世の戴冠式〔一八八一年〕からは丁度一〇年が経っていた。〔飢餓とコレラの〕その時点に至るまでの一〇年間もまた、〔ツァーリらには〕あたかも「平穏無事の治世」であったかのようであった。

しかし、ロシアの最も良き人々はこの「平穏無事の治世」がどんなものかよく理解していたが、彼らの口は封じられた。官僚的なロシア全体が手の付けられない嘘つきだったので、あちこちから〔治世十周年の〕お祝いの挨拶が届いた。

モスクワへはツァーリ自らが出向いて、自ら、この古都の挨拶を受けた。総督宮殿には貴族階級の代表者らが集まった。ツァーリは彼らの前に進み出て、スピーチの第一声をこう放った。

「おかげで、この一〇年が平穏無事に過ぎた」と〔注二四〕。

ツァーリのこのレセプションに参列した人々は語った、この「平穏無事」発言は最高位の貴族らにもショックを与えた、と。出席者は互いに顔を見合わせた、果たしてロシアのツァーリは自身の臣民の飢餓とコレラと一揆と死刑とについて本当に平穏無事な出来事だと思っているのか、と〔注二五〕。

明くる日、公式な電報が打たれ、ロシアの隅々にまでツァーリのこの言葉が届けられた。それは、飢餓に苦しむ諸県で、ヴォルガ地方で、都市や村落の文字の読める人々のいる至る所で、読まれた。そして皆、気づいたのだ、人民の災厄がツァーリの耳には届いていない、ということを〔注二六〕。ツァーリは自らの祖国の生活について宮廷と警察の警護隊 oxpana の報告によってしか評価していない、ということを。宮廷では誰一人、〔人民の災厄を伝えて〕ツァーリその人を不安がらせる者はいなかった。つまりは、〔陛下のおかげで〕ロシアは幸せすぎるから、というわけだ。

Ⅳ ■ニコライ二世、■新たな期待、■ツァーリ、「馬鹿げた幻想だ」と宣う

一八九四年、アレクサンドル三世が亡くなった。玉座にはその息子ニコライ二世が就いた〔注二七〕。

そして再び、ルーシで、いつもながらの期待の念が蘇った。若きツァーリは善良で親切な人だ、と語られたのだ。こんな噂が拡がった、クリミアからの帰途、いろいろな代表団と応接している際に、ツァーリが「すべての階層との」統一について、（貴族階級だけではなく）「ロシアの地のすべて！」について語った、というのである。

〔同じ一八九四年〕一一月一四日、若きツァーリはドイツ人のヘッセン大公の娘と結婚した〔注二八〕。このことではまたもやこんなことが言われた、結婚の祝宴式の際、ペテルブルグには警察はいなかった、いたのは軍隊と騎馬憲兵と屋敷番のみだった、と。このことは人民を有頂天にさせ、ツァーリは歓呼の声で迎えられ見送られた。ツァーリは確信を得たのである、ロシア人民は相変わらずツァーリを信頼し、彼個人に期待をしている、と。この人民の期待の念は、人民には憎たらしい警察の隊列と比べ、よりよくツァーリを保護するものだった。「良き噂は動かず、悪しき噂は走る」〔悪事千里を走る〕という決まり文句があるけれど、これはツァーリには関係のないことだった。ツァーリについては、彼らがどんなことを為そうとも、「非難すべきプラウダ〔真実〕は沈黙し、称賛すべき嘘は自由に広まる」次第だからだ。

よって再び、都市と村落で、遥か彼方の小さい村々にまで、ツァーリ

のプラウダ〔真実／正義〕への期待の念が誕生し始めた。こう語られたのだ、若きツァーリは警備隊なしに町を歩き回り、ごく普通の人々や学生らとの対話を始めているし、これまでのすべてのツァーリのように「土塁」が身の回りを取り巻くこと、このことをもはや許してはいない、と。同じことが、ゼムストヴォ〔県・郡の地方自治会〕の会議でも市会でも語られ出した。

ゼムストヴォには独自の仕事があった。ゼムストヴォとは全階層の機関である。そこでは貴族と富裕な屋敷所有者 владельцы とが優勢ではあったが、百姓〔ムジーク〕も小さな屋敷所有者も参加していた。しかし、ゼムストヴォには、貴族にあるような権利がなかった。人民の要求と苦情について高級官僚を差し置いて直接に君主に報告する、という権利のことだ。だが、今やゼムストヴォの会議の場で、そこの最良の人々がこの不公平について語り始め、ゼムストヴォにこの権利を与えるように請願すべく準備をしたのだ。

こうした請願について最初に企図したのはトヴェーリ県のゼムストヴォであった。皇帝陛下への〔結婚への〕祝辞 адрес が作成され、会議の場で読み上げられ、採択された。その際、反対したのはゼムストヴォの八名の幹部連のみだった。しかし、当地の県知事が慌ててこの会議決定に異議を唱え、ツァーリへの祝辞を許可しなかった。ゼムストヴォ代議員らは皇帝陛下宛て祝辞を、宮内省大臣ヴォロンツォフ＝ダシコフ伯爵を通して送付すべく決心した〔注二九〕。だが大臣もまたその提出に賛成せず、中身を点検もせずにこの祝辞をトヴェーリの県知事へと戻したのである。

しかし期待の念はまだ消えなかった。〔一八九五年〕一月にはツァーリの結婚祝賀会のために祝辞を携えて全土からやってくる代表団のレセプションが予定されていた。ゼムストヴォ代議員らはその歓迎の席で〔ロシア人の古い習慣として〕「パンと塩」を差し出す際に、祝辞を述べる中で自らの願望と期待の念とを再び繰り返すことに決した。しかし高級官僚らも準備をしていて独自に手を打っていた。当時はまだポベドノースツェフが健在だった〔注三〇〕。その前の治世の時の最悪の文官で、今度は新しいツァーリをことごとく意のままにしていた。

一八九五年一月一四日、ペテルブルグに全国津々浦々から諸階層、諸機関の代表者たちが集結した。決められた時刻に皆々、「パンと塩」を携えてツァーリの宮殿へ出向いた。心やさしき祝辞と期待の念を伝えるためである〔注三一〕。皆々、知っていた、この瞬間が決定的なものとなるだろう、新しい皇帝は何か重大な、決定的な言葉を述べたもうのだ、と。

そして彼は語ったのである。

十二時に扉が開かれ、ツァーリが広間に入って来た。広間は廷臣と、各階層・各機関の代表者で埋まっていた。ツァーリは興奮していて両手で帽子を握っていた。二十歩ほど歩むと立ち止まり、帽子の中を覗き見

ながら弱弱しく話し出した。帽子の中には、スピーチの書かれた紙っ切れが入っていた〔注三二〕。その後の噂では、スピーチはポベドノースツェフが書いたもので、若きツァーリがへまをやらないようにと帽子の中に置かれた、とのことである。スピーチの終わり間際で、ツァーリはほとんど神経質な興奮した声で叫んだものである。若きツァーリのこの叫び声の中に、全ロシアが、トヴェーリのゼムストヴォ代議員らの書いた控えめな願望への高級官僚らの返答を、聴き取った。

トヴェーリの彼らは何を求めたのか。その何とささやかなものであったことか。この祝辞の中から正確な抜き書きをしておこう〔以下、＞　＜で括った箇所は原文の太字部分〕。

「皇帝陛下殿！　陛下の＞ロシアの人民＜への＞最初の奉仕＜の意義深いこの時、ゼムストヴォは臣民の祝辞でもって陛下に挨拶申し上げます。私たちは、玉座の高みから＞人民の要求 **нужда** の声に耳を傾けられる＜ことを期待する者です。（中略）法が毅然（きぜん）として、人民の側からも＞権力の代表者の側からも＜執行されることを期待する者です。（中略）そして最後に、君主よ、私たちは社会機関 **общественные учреждения** のために、その機関が関わるところの次の問題に関して＞自己の意見＜を表明する、そうした可能性と権利とが与えられる日を待ち望んでおります。すなわち、＞行政の代表者たち（すなわち官僚）のみならずロシア人民からの要求と見解とが玉座の高みに届かんことを＜」

これで全部である。一八九五年には、こうした温和な請願書を、あらゆる層のゼムストヴォが提出した。だが、高級官僚らはその中に自分たちにとって危険なものを見て取った。彼らが気に入らなかったのは、祝辞のなかに「ロシア人民へのツァーリの奉仕」が語られていたことだ。官僚らがツァーリに鼓吹していたことは、「全祖国がツァーリに奉仕しなければならない」ということで、「ツァーリが全祖国に奉仕しなければならない」、ではなかった。さらに彼らによくないことは、「彼ら官僚もまた法を遂行するように」という要求であり、一番好ましくないことは、「代議員の人々が、たとえ地方的な問題であっても、彼ら官僚を通さないで直接ツァーリに報告できるようにせよ」という要求であった。こんな要求を認めたら、官僚らの考えでは、「障壁」**средостение** が破壊されてしまい、地上の真の声がツァーリの耳に届くことになるだろう……。

というわけで、古臭い廷臣たちがツァーリに対して、ロシアの民 **русская земля** への返答を耳打ちしたのである。ツァーリのスピーチはあらゆる新聞に載せられた。ツァーリはこう結んでいる。「近年、国内の行政問題へのゼムストヴォの参加に関する＞馬鹿げた幻想＜ **бессмысленные мечтания** に取り憑（つ）かれている人々の声が聞こえていることを私は知っている。私は（中略）私の忘れがたい今は亡き父上〔アレクサンドル三世〕が守ったと同様に、堅固に専制の原理を守るであろう。このことを皆々が知るように望む」

ここで指摘しておかなければならないのは、当時は専制に対してまだ誰もよからぬことをたくらむ者はいなかった、ということだ。そして、ゼムストヴォ代議員の請願は、君主に対して願書と陳情書を提出する権利は官吏だけのものでもなく貴族だけでのものでもない、という点にのみあった。

だが、この温和な嘆願が「馬鹿げた幻想」と呼ばれてしまったのだ〔注三三〕。このスピーチの印象はあまりにも思いがけず、強烈なものだったので、「パンと塩」を持って近づいていた或る代議員は進物をうっかり足元へ落してしまった。ゼムストヴォの人々は、貴族出身の最良の代議員でさえもが、ツァーリのレセプションから退場する際には、心に悲しみが、魂には侮辱感が、満たされていた。全ロシアをこんなニュースが広まった、ロシアのツァーリがまるで学校の生徒みたいに紙っ切れに頼って演説をした、中身はツァーリの役所の悪霊のポベドノースツェフによって耳打ちされたものだ、と。すなわち、ツァーリへの希望が断たれた、その子供っぽい期待の念にとうとう終止符が打たれたのだ！　露骨にこう言われた、ツァーリへの期待は夢に過ぎない、と。おまけに、馬鹿らしい夢、ときている。私は当時、ヴォルガ地方に住んでいたが、そこには多くの古儀式派の人々〔一七世紀後半のロシア正教会の典礼改革、いわゆる「ニコンの改革」に反対した分派＝ラスコーリニキを指す〕、聖書を読む人たちがいた。彼らの一人は、聖書のレハベアム王の物語を思い出しながら、汽船の中で乗客に囲まれながら、こう語った。

「もちろんだ、今ならロシアの人民はこう言うだろうよ、イスラエルの民がレハバアム王に言ったようにね、『我ら、ロマノフ家の中に何の分あらんや』と」

しかしながら、素朴で無知蒙昧な人民の中にはまだ〔ツァーリへの〕期待の念が生きていた。そして、それが一掃されるためには多くの困難な教訓が必要だったのである。

ニコライ二世の治世は、こうした教訓の出し惜しみをした。ロシア人民は、そうした教訓を得るために、恐ろしく困難な、苦しみに満ちた長い道を歩まねばならなかったが、このことはロシアを破滅の淵に立たせたのである。

V　ホドインカ原の大惨事

一八九五年五月一四日、ニコライ二世とその若い妻との戴冠式が行なわれた。ツァーリらは常にモスクワで即位してきた。今回もこの式典がウスペンスキー大聖堂〔モスクワのクレムリン内の生神女就寝大聖堂〕で催された。

人民はこれまで通り大喜びし、「万歳〔ウラー〕」を叫び、街路を埋め尽くした、あたかも飛んでもない幸せが待ち受けているかのように。ツァ

ーリもまた自身の人民に対してお祝いの贈り物をふるまいたかった。巨大なホドィンカ原で野外行楽〔グリャーニェ〕が開催されることとなり、人民には事前にこう知らされた、善良なツァーリが皇后と共に、結婚祝賀式の記念として、忠実なる臣民に対して、ツァーリの姓名の頭文字入りの柄付きコップと、肖像入りのハンカチとを用意している、と。この取るに足りない撒餌（まきえ）пустая приманка を目掛けて、モスクワ市の無数の人々と、その他の都市と村落の人たちとが押し寄せた。

このお祭りの最高の統括権については、市会とこれまで通りの警察当局とのほかに、新しいツァーリの取り巻きの寵臣たちに委託されていたことが知られている。後者は、経験ある人々に問おうともせずに、自己過信の自信満々で、愚かしく取り仕切ろうとした。

その日は晴れ上がり、お祭り日和だった。押すな押すなの人だかりとなった。まるで本物の大洋のように波をゆらめかせる人の海を眺めるのは恐怖を覚えるほどだった。特別なぎゅうぎゅう詰め状態 давка が、ツァーリの贈り物を出し揃えている木造バラック群 балаганы のそばで発生した。これらのバラックに押し寄せるための合図が待たされていた。期待に満ちた群衆は思考も意志もなく波打っていた、まるで風にそよぐ穂のように。目撃者たちは、災厄の予感から恐怖に捉われた、と語っている。すでに或る人々は倒れ込み、子供らは叫び声を上げ、女性たちは気分が悪くなった。ごく思慮深い人たちは群衆から逃れ出ようと努めた。

だが、大衆のすべてが狂気に捉われていた、一〇コペイカのツァーリの「つまらぬ暇つぶしの品（しな）」бирюлька を得ようとする願望のために、意気揚々（いきようよう）とその品を家に持ち帰って、それをイコン〔礼拝用聖像画〕のある室内の「美しい隅」に置くために、理性を失ってしまったのだ。

そしてついに合図が出された。群衆はそれらのバラックに押し寄せた。後の者が前の者を圧迫した。前の者らは狭い通路に入り込むことが出来なかった。彼らは〔通路の〕塀 ограда の角に、壁にと、体を押し付けられた。柵 барьеры のところで体が半分に折り曲げられ、押し潰（つぶ）されようとした。人間のものとは思われない叫び声が響いた。盲目的な恐怖が襲（おそ）った。倒れた者は起き上がることが出来なかった。踏みつぶされたからだ。死のうがどうなろうが、見ている暇も、考える暇もなかった。群衆はどこへ移動しているのかもわからず、あっちからもこっちからも押しくら饅頭（まんじゅう）をしているようで、人々は殴り合ったりもしたが……一方、群衆の波の一方の端には、深く掘られた土砂採掘場 карьер があった。そこは何も囲っていなかった。どんどん押されながら人々はその採掘場の底へと落ち込み、積み重なって窒息死したのである。

ツァーリの贈り物をめぐるこの祝賀行事が終わると、広場には多数の死体が残された。それらは列をなして横たえられた。そこでは肉親らが身内を見つけようとしていた。このホドィンカ原でも、そこと隣接する地域でも、全モスクワでも、泣き声が、うめき声が、絶望の声が上がっ

た。

善良なモスクワ人民へと贈り物が出されるべき祭典はこうして終わった。厳格な捜査取り調べが命じられ、誰の責任でこの大きな災難が起きたのか、解明することが期待された。もちろん、死んだ人々は戻ってはこない。だが、「多くの人々の死に責任のあるこの祭典の運営担当者側のいい加減さと能天気ぶりとに対して、ツァーリもまた深く失望し激怒している」のであったとしたら、人民の感情は少しは満たされたのかもしれない。ところが、「コレラ一揆」後の彼の父親〔アレクサンドル三世〕と同様、真犯人は探し出されもしなかった。ツァーリは、彼自身の知己であるこの祭典の運営者らを悲しませることを望まず、それどころか、彼らに勲章を下賜(かし)したのである。廷臣たちいわく、「我らのツァーリはなんと優しいお人柄であることか。ツァーリはこの喜ばしき時期に、祭典の運営者たちを悲しまそうとはなさらなかった」と。

このツァーリの祭典の場で自分の妻か夫を、兄弟か子供を失った、数知れないごく普通の人々の悲しみと絶望とを、「優しい人柄のツァーリ」は見なかったし、聞こうともしなかった。誰一人、あえてこの件でツァーリに言上(ごんじょう)する者もいなかったのである。

ホドインカ原の災難は新しい治世の始まりに暗い影を落とした。迷信的な人々はそこに前兆と凶兆(きょうちょう)とを見た。しかし、予兆を信じない人々もまた、〔こんな出来事の後でも〕さらに続いた宮廷の祝典についての記事を読んでは、首を横に振った。「これはまさに凶兆だ」と彼らは語った、「かれの父親と同様、新しいツァーリもまた貴人高官や上流貴族の眼で眺めている。そのせいで、ロシアを見ていないしその声を聞いてもいない」と。

当時、新しい治世は「血に塗(まみ)れた」、と言われたのである。

（「水源地」七号に続く）

補記

●文中の〔　〕内は訳者による。訳文中、サンクトペテルブルグは単にペテルブルグと略記した。テキスト内の年月日は旧歴＝ユリウス暦である。一九世紀で一二日、二〇世紀で一三日、新暦＝グレゴリオ暦よりも後れている。

●底本は、『未刊のコロレンコ　全三巻、第二巻　政治社会評論　一九一七～一九一八年　論集』、ロシア国立図書館「手稿研究部」編（発表・編集・注マカゴノヴァ、ピャトゴエヴァ）、モスクワ「パシコフ・ドム社」、二〇一二年刊。Неизданный В.Г.Короленко. [В 3 т. Т.2]: Публицистика. 1917-1918: [сб.ст.] / Российская гос.б-ка, НИО рукописей; [публ., сост., и комментиров. Т.М.Макагоновой, И.Т.Пятгоевой]. – М.: Пашков дом, 2012.

●参照文献

一、『ロシア・ソ連を知る事典』、監修・川端香男里、佐藤経明、中村喜和、和田春樹、平凡社、一九八九年八月二五日、初版第一刷発行。

一、インターネット・ウィキペディア（ロシア語版を含む）。

一、『ロシア史』、和田春樹編、山川出版社、二〇二三年四月三〇日、第一版第一刷発行。「上」「下」全二巻。

一、和田春樹『農民革命の世界』、東京大学出版会、一九七八年一〇月五日発行。とくに「4　意識　『ロシア農民の内面世界　読書ノート』」。

一、コロレンコ『わが同時代人の歴史　第三巻、第四巻』、訳・斎藤徹、文芸社、二〇〇六年一二月一五日、初版第一刷発行。

●以下の「注」一～三四は、本テキストの底本の編者マカゴノヴァ、ピャトゴエヴァによる「注」をそのまま訳したものである。

注一

「ツァーリ権力の瓦解」

初出「ルースキエ・ヴェードモスチ〔ロシア報知〕」紙、一九一七年九七～九九号、五月二～四日（新暦一五～一七日）。本テキストの底本は、「ポルタワ学生社会主義者連合」版（一九一七年六月刊）。その「出版社から」によれば、「コロレンコの本版は、今までに出された他の諸版とは若干、異なっている。今回、著者が若干の変更を加えているから」とある。

注二

「一九〇五〔明治三八〕年、民衆騒動の後、国会〔ドゥーマ〕召集の詔勅（しょうちょく）が発布された」

「国会〔ドゥーマ〕召集の詔勅」とはウィッテ〔一八四九～一九一五〕が準備をし、一九〇五年一二月一一日に公布された国会の選挙に関する法律を指す。政権は財務的破綻になりかけているとする〔ストライキ指導のために各工場の労働者代表からなるストライキ委員会として発足した〕ペテルブルグ・ソビエト公布の「財政マニフェスト」に答えて、〔この「十月詔書」は〕用意された。

注三

「一九〇五年一〇年一七月詔書」〔国会召集〕の意義

この勅令は、国会の承認によってのみ新しい諸法律を採択すること、を前提としていた。

注四

「ツァーリは約束を守ろうとせず、国難の際に、人民から選出された人たちと一緒になって統治したい、とは思わなかった」

第一国会は一九〇六年七月八日に解散させられた。同年の秋、第二国会の選挙が行われた。新しい選挙法が、国会構成員の承認なしに採択された。人民代表制の形態に関するコロレンコの考察は、以下の覚書に反映されている。『国会への参加の問題について』К вопросу об участии в Государственной Думе（「ポルタフシチナ〔ウクライナのポルタワ地方〕」紙、一九〇五年、第二四八号、九月二四日、一〇月七日）。なお、この問題については、国会のい

わゆる「ボイコット」に関するヴェインベルグ〔一八三一～一九〇八、詩人、翻訳家〕の意見をめぐる分析的記事もまた、言及している。

注五

「その結果、彼は〔一九一七年〕二月二六日に国会を解散した」

一九一七年二月二五日の政治的なゼネラル・ストライキの後、ツァーリは国会の業務の中断 перерыв を宣言した。その詔勅は〔コロレンコ記すところの〕二月二六日ではなく、二月二七日付けで公布された。議員はそれに従った。

注六

「約束を守らなかったツァーリは退位した」

国会解散は、ミハイル・ロヂャンコ（一八五九～一九二四年）を議長とする第四国会の「臨時委員会」の結成を急がせた。権力の合法的移行を作り出すために、「臨時委員会」は自分たちのコミサール＝国会代議員を内閣の大臣として任命した。ニコライ二世〔一八六八年生、在位一八九六～一九一七年〕は、そこに至るまでに行われた改革を是認することができなかった。コロレンコは本論文〔『ツァーリ権力の瓦解』執筆時に、タチヤーナ・ボグダノーヴイチ〔一八七二か七三～一九四二年、女性作家、歴史家〕の『革命の偉大な日々一九一七年二月二三日～三月一二日』Великие дни революции. 23 февраля – 12 марта 1917 г. を受け取っている。それはまさに国会「臨時委員会」で発行された著作であった。

注七

ピョートル一世（一六七二年生、在位一六六二～一七二五年）は、ロシア皇帝（インペラートル）を称した。ピョートル一世の「際立って厳格な性格」の歴史的・民族的意義について、コロレンコは論文『ポルタワの祝祭』Полтавские празднества の中で略述している。この論文は一九〇九年四月に、〔一七〇九年の〕ポルタワ会戦勝利の二百周年を記念して、ウィーンの新聞「新自由新聞」(Neue Freüe Presse) のために特別に執筆された。その際のタイトルは<Die Festtage von Poltave >である（同紙一九〇九年六月一一日付）。

注八

アレクサンドル二世（一八一八年生、在位一八五六～一八八一年）はロシア皇帝（インペラートル）ニコライ一世〔一七九六年生、在位一八二六～一八五五年〕の長男、一八五六年八月二五日即位、アクティブな改革者。国家評議会〔ゴスダールストヴェンヌィ・ソヴェート〕の大多数の意見に反して、アレクサンドルは「一八六一年二月一九日の条令」〔農奴解放令〕を公布し、農民を土地付きで有償で解放した。国家予算の公開性〔グラースノスチ〕が導入され、体罰が廃止された。彼のもとで〔一八六三年に〕大学法令が採択され、大学の自治が与えられた。一八六四年には地方自治会〔ゼムストヴォ〕と司法制度の

改革を、一八七〇年には地方都市の自治に関する法令を施行した。アレクサンドル二世の軍事改革は一般兵役義務を決定した。彼のもとで市場銀行信用制度と陪審員裁判の基礎が置かれた。「アレクサンドル二世は改革を遂行したから爆弾で破滅したのだ」という「公式的プロパガンダへの警句」があるが、これに対してコロレンコは批判している。その論文『専制政治の無力』Самодержавная беспомощность（「解放」誌、ジュネーヴ、一九〇三年、第一四号、二二六頁）に彼はこう書いた、「アレクサンドル二世の破滅は改革のゆえではなく、すでに動き出した国にストップを掛けようとしたがためである」と。

注九

ロマノフ朝最初のロシア・ツァーリ〔皇帝〕であるミハイル・フョードロヴィチ（一五九六年生、在位一六一三～一六四五年）は、ゼムスキー・ソボル〔「全国会議」。一六世紀半ばから一七世紀にかけてロシアで行われた一種の身分制議会〕によって、一六一三年二月二一日に、即位を承認された。

注一〇

スウェーデンの外交官マリアン Мариан〔生没年不明〕が一七三八年九月に記したメモランダムは、アンナ・イオアンノヴナ女帝〔一六九三年生、在位一七三〇～一七四〇年〕とビロン〔一六九〇～一七七二年〕の時代に関わるものだが、コロレンコは一八九五年二月一二日、専制権力に関する自己の考察の観点から、すでに、その抜き書きをしている。しかし、コロレンコは、権力者自身による「権力の原則」の記述を含む史料をも、決して軽視はしなかった。

彼はニコライ・パーヴロヴィチ大公〔のちのニコライ一世〕の『作文』をも入念に検討している。それは、マルクス・アウレリウス〔一二一～一八〇年、第一六代ローマ皇帝、『自省録』の著者〕に関するもので、ニコライは彼の「公徳心」Мораль の教師であるアデルング教授〔一七六八～一八四三年〕の依頼でこの『作文』を書き上げた。〔以下はその一部である〕

「皇帝（インペラートル）の義務を遂行するために、未来の皇帝は宮廷との関係を結ばなければならない。自分とは遥かに懸け離れた場所で何が起きているのか、そのすべての把握が出来るようにするために、である。国家すべてが「彼の心の目の前で」перед его мысленном оком 一点に集中されるために、である。臣民のうめき声、不平不満、甲高い悲鳴のすべてが彼の耳に届かなければならない。その意志と同じ早さで彼の権力が行使されなければならない、公共の福祉のすべての敵を鎮圧し根絶するために、である。しかし、君主もまた、人間の本性からして、弱い存在である、臣民の最後の一人までもがそうであるように（как и последний из его подданых）。マルクス・アウレリウスよ、プラウダ〔真実／正義〕と汝との間には、山岳が聳え立ち、

海と川が創られて拡がっている。すなわち、しばしば、汝（なんじ）は、宮廷という「壁」によってのみ、このプラウダから分け隔てられるだろう。ともかくも、プラウダはこの「壁」を突破できないだろう。汝に伸ばされる救いの手は大して汝の弱さを助けないだろう。（中略）君主の意図に沿っては何事も為されず、しかるべき形では何一つ彼のところに届きはしない。善は誇大視される、悪は身を隠す。（中略）君主は常に弱くして騙（だま）されてばかりいる。すべてを見聞きするためにと君主が取り立ててやった者らによる誤解、あるいは裏切りからの影響に君主は常に晒（さら）されている〔下略〕〔この下略の部分を起こすと以下の通り。「君主は常に、知ることの不可能さと行動することの必要さとの間で動揺している〕」

以上は、「ロシアの旧習」誌の〔一八七四年・第九巻〕二月号〔第二号〕にピャトコフスキー（一八四〇～一九〇四年、文学史家、ジャーナリスト）が〔上記ニコライの『作文』を自分でフランス語から露訳したものを〕公表したものである。コロレンコはこの『作文』を綿密に分析し、その中から上記の引用文を自分で抜き書きする必要を感じたのだった。

〔ニコライ・パーヴロヴィチ大公＝のちのニコライ一世のこの『作文』のタイトルは、『マルクス・アウレリウスに関するニコライ・パーヴロヴィチ大公の作文（「公徳心」の授業の教授アデルングへの手紙）』（一八一三年一月二四日付）。Сочинение В.К. Николая Павловича о Марке Аврелии (Письмо к профессору морали Аделунгу). 24 янв. 1813 год. これは、当時人気のあったフランス人作家アントワーヌ・トーマスの著作『マルクス・アウレリウスへの賛辞』Похвальное слово Марку Аврелию (Eloge de Marc Aurele, par Ant.Thomas) についてのニコライの読後感である。このトーマスの著作（仏文）は、ニコライへの「公徳心」の授業でアデルング教授が用いたもので、その読後感を生徒のニコライに書かせたのである。ニコライのこの『作文』の全文は以下のサイトで閲覧できる。

http://az.lib.ru/n/nikolaj_p/text_1813_avrely.shtml

これを見るとわかるが、この『作文』のかなりの部分が、トーマスの著作からの抜き書きで占められている。上記の「皇帝の義務の遂行のためには」で始まる引用文は、じつは、ニコライの地の文章ではなく、ニコライが引用したトーマスの文章そのものである。〕

注一一

アンナ・イオアンノヴナ〔一六九三～一七四〇年〕はロシア女帝〔在位一七三〇～一七四〇年〕で、イヴァン五世・アレクセーヴィチ〔一六六六年生、在位一六八二～一六九六年〕の娘。彼女の治世の下で元老院〔セナート〕は最も重要な位置を失った。内閣 Кабинет министров〔皇帝の直属機関〕が励んだことは、貴族の所有地の占有権の強化と、貴族の勤務期間の制限と、貴族の特典の拡大とばかりであった。このことは、結局は、国益を損なうものだった。国家機関は陰謀の舞台と化した。コロレンコの論文『一八世紀の或る郡市での政

治クーデタの反響』Отголоски политических переворотов в уездном городе XVIII века はこう始まっている、「一七四〇年一〇月一七日、『永久の記憶に値する聖なるアンナ・イオアンノヴナ女帝』が逝去した」と。コロレンコはさらに書いている、「その治世では、内閣でさえもがビロンが在席していないところでは女帝の面前で報告することができなかった。このことはアンナ・イオアンノヴナ女帝の『専制』だと言われた」と。

注一二

ビロン・エルネスト＝イオガン〔一六九〇～一七七二年〕はクールラント・ゼムガレン公国〔一五六二～一七九五年〕の公爵。アンナ・イオアンノヴナ女帝の寵臣 временщик、寵愛者 фаворит。上述の論文でコロレンコはこう書いている、「ビロンが思うに、専制を守るには、女帝が彼の耳を通してのみ聞くこと、彼の眼を通してのみ見ること、彼の頭脳によってのみ考えることが必要であった。女帝はこのことに同意したのだ」と。この論文でコロレンコは次のような対比を行なったが、このことは「ツァーリ権力の瓦解」の考察に役立った。すなわち、「ビロン独裁」бироновщина にがんじがらめにされたアンナ・イオアンノヴナの「専制」（彼女の「エゴイズム」самость を、その擦り切れた人格を見よ）と、最後の専制君主〔ニコライ二世〕がトヴェーリ地方自治会〔ゼームストヴォ〕に返した回答とを比較検討してみたのである。後者の場合も、ツァーリがじかに〔トヴェーリ地方自治会からの〕祝辞の原本を読んだ結果、返答をしたわけではなく、「祝辞についての大臣の報告によって」いたのだ（前者の場合と同じく、皇帝陛下のこの「エゴイズム」самость を見よ、というわけだ。こちらはのちに打倒されてしまうが）。

注一三

コロレンコが引用したレールモントフ（一八一四～一八四一年）のこの熱烈な詩句は〔その名高い詩作品〕『詩人の死』から採られた。それはプーシキンの非業の死に触発されて書かれ、プーシキンの正義への情熱に応えたものだった。プーシキン、レールモントフ、トゥルゲーネフ、シチェドリンを読む権利を求めて、コロレンコは〔シベリア流刑前の一八七九年五月～一八八〇年七月の追放中に〕ヴャトカ県の当局を相手に闘った。「君たちの前では、審判とプラウダ〔真実／正義〕さえもが、だんまりを決め込んでいる始末だ」というレールモントフの明確な定式化があるにもかかわらず、コロレンコは、時の内相レフ・マーコフ〔一八三〇～一八八〇年〕に対して、内相の管轄する機関では「裁判と取調べもなく、証拠もなしに」流刑に処された人々がどのような扱いを受けているのか見てほしい、と訴えた。そして「すぐに私は、本質的に法の外に置かれながらも、訴状の提出という正当な権利を行使することにどんな意味があるのか、を身に染みて感じさせられる運命にあった」。すなわちマーコフ内相の著名な通達がロシア国中に送付され、そこで以下の説明がなされたのだ、すなわち、コロレンコの如く、社会の同情を利用しな

がら「異議申し立て」の意図か行動かを周囲の人々の間に弘めることに助勢するような人士は、特に有害である、と。「おかしいよ、ツァーリの為さりようは。（中略）なんで、良き人々が追い立てられてるんだ？」とは或るヴォチャーク人〔ウドムルト人の旧称〕の言い草だが、この人もまた、〔追放の地での〕勤勉な働き手コロレンコの人柄に魅せられた者の一人だった。大臣への訴状に続いて、コロレンコは捜索を受け〔同じヴャトカ県内の集落〕ベリョーゾフスキエ・ポチンキへの居住追放処分となった。「郡警察署長のことで県知事に訴えても、県知事のことで大臣に訴えても、どちらも同じことを意味する」とは、勝ち誇った郡警察署長を前にしてコロレンコが理解しなければならないことだった。

注一四

「アレクサンドル二世の名前は永遠に、農奴制の従属からの農奴の解放と結びついている」

「玉座のそば」に立つ者の一人マーコフ内相の国内的覚醒 внутренние побуждения の理解にみられる皮肉な要素は、ツァーリ自身の活動を評価する際にも、存在している。アレクサンドル二世宛ての簡単な報告書の作成に従事し、その文書決済ぶりを研究したアンネンスキー〔一八四三～一九一二年、経済学者、統計学者〕の言によれば、頻繁に、この「根っからの改革者」〔アレクサンドル二世〕の注意が、ありとあらゆる形式主義の方向へと逸らされていた、という。国家会計の根本的改革の必要性に関するニージニー・ノーヴゴロド県の統制局長タタリノフ〔一八一六～一八七一年〕の報告書を称賛しながら、玉座におわすアレクサンドル二世は「その報告書が形式的な絹糸で縫われたものでない」ことを認めざるを得なかった。似たような報告書は国旗の三色〔黒・黄・白〕の絹糸で縫われていることが判明したのだが。

注一五

ボグダン・フョードル・オシポヴィチ〔姓・名・父称〕はキエフ〔キーウ〕の農民で政治流刑者。コロレンコ『わが同時代人の歴史』История моего современника〔第三巻、第一部〕「第六章　直訴人たち　ツァーリ本人に達したフョードル・ボグダンの来し方」、「第七章　ボグダンとサンニコフ兄弟の宗教」参照（コロレンコ『著作集　全一〇巻』、第七巻、モスクワ、一九五五年、二八、四〇～四七頁参照）。

注一六

「周知のように、アレクサンドル二世は残念な死を迎えた」

〔一八八一年三月一（一三）日に〕アレクサンドル二世（一八一八年生、在位一八五五～一八八一年）は、イグナト・グリネヴィツキー〔一八五六～一八八一年〕の投じた爆弾で殺害された。コロレンコ著『わが同時代人の歴史』〔第三巻、第三部〕第四章は「一八八一年三月一日の悲劇」と題されているが、そ

の中でこう書いている、「アレクサンドル二世は自身が始めた事業を甚だしく軽んじつつ、性急この上もなく、その事業を裏切った。解放令を発した若きツァーリの心身からは、一八七〇年代の末頃になると、もはや、みすぼらしくも、後悔の念にさいなまれ、びくびくとした反動家が残されているだけであった」と。コロレンコがこの現象に思いを致し、その悲劇的な本質を意識し始めたのは、まだ、〔追放中の〕ヴャトカ県のグラーゾフの「森の中の人気なき所 нежить」の状況下でだった。〔集落〕ベリョーゾフスキエ・ポチンキの広々とした所へ出てきた時には、すでにそうした考えを抱いていた。『わが同時代人の歴史』でコロレンコは書いている、「アレクサンドル二世は『司法改革諸法令』（一八六四年一一月二〇日付）を公布したのだが、そうした彼が、少しにせよ政治的モチーフに関わるすべての面で、アジア的専横の道に踏み込んでしまったのだ」と。

注一七

アレクサンドル三世（一八四五年生、在位一八八三～一八九四年）は、政治的弾圧の方針を採ったロシア皇帝。インテリゲンツィヤとの闘争を行ない、リベラル反対派との闘争のテロ的手段を豊かにし、「異民族」〔主にロシア東辺部在住の非ロシア人〕と「異教徒」への差別を強化した。コロレンコの言によれば、アレクサンドル三世は自らの政策の人質となった。すなわち、彼は「ガッチナ宮殿の虜（とりこ）」であり、「鋳鉄製のツァーリ」であり、「びくびくとしていて、どもりがちで、すぐ顔を赤くする軍服着用の青年で、無神経かつ不必要で明白に紋切型の表現「馬鹿げた幻想」発言〔のちのニコライ二世の発言につながるが〕によってすべての在席者にショックを与えたのである。」このようにアレクサンドル三世はコロレンコによって描き出された（論文『専制政治の無力』、「解放」誌、ジュネーヴ、一九〇三年、第一四号、二二六頁、参照）。アレクサンドル三世の時代は、コロレンコの政治社会評論において、とくにニージニー・ノーヴゴロド総督バラーノフ〔一八三七～一九〇一年。総督在任は一八八二～一八九七年〕の世襲地に関する論文の中で、反映されている。

注一八

ヂェリャーノフ・イヴァン・ダヴィドヴィチ〔姓・名・父称〕（一八一八～一八九七年）は伯爵、元老院議員、国家評議会 Государственный Совет の一員、国民教育省大臣（一八八二～一八九七年）。『わが同時代人の歴史』でコロレンコは「料理女の子供たち」に関する通達、「気の違った老人ヂェリャーノフ」の通達について思い起こしている。A・チチェーリン〔一八二八～一九〇四年〕はヂェリャーノフの「空疎さ」について述べている、彼は「ロシアの諸大学を押しつぶし」そのことによって「伯爵の位に昇級した」と。

注一九

「例えば、興味あることに、一八九一～一八九二年にロシアを大きな飢饉が襲った。ボリス・ゴドゥノフ時代〔注一九〕以来、経験したことのないほど深刻なものだった」

コロレンコが念頭に置いているのは、一六〇一～一六〇三年の凶作のことで、丁度、一五九八年からモスクワ・ルーシのツァーリを務めていたボリス・ゴドゥノフ（一五五二年生、在位一五九八～一六〇五年）の治世に当たっていた。

注二〇

紀元前七世紀の小預言者ザパニヤ（ゼファニア）によるユダヤ王国の危機的状況に関する予言は、コロレンコにとって、飢饉の一八九一～一八九二年にぴったり当てはまるものと思われた。この大胆なたとえを、コロレンコは司祭から口伝えに知らされたのである。

注二一

「大臣たちはこの大きな災厄の隠匿と人民救出の拒否とに努めた」

こうした出来事を権力側が隠蔽することを助けたのは、「恩恵を被っている」新聞雑誌側の部分であった。最初は、アレクサンドル三世の定期刊行物への配慮は、プレス側の功績を認知するものと受け取られた。よって、幾つかの発行物に、ツァーリを出版事業管理総局と対立させるというナイーブな試みが現れた。だが、すぐさま、検閲がそちらへも矛先を向けた。

注二二

「飢餓に続いてコレラが到来した」

一二年前の出来事〔一八九三年か〕に対する回顧的な見解を、コロレンコは以下の文章で示している、『十二フィートの投錨地での検疫』（「ロシアの富」誌、一九〇五年五月、第二部、五八～七八頁参照）。この中の「近い過去のささやかな頁」が保存しているのは、バクーのロズゲ伯爵、アストラハンのテヴャショフ伯爵その他の県知事たちの衝撃的な無能力ぶりの事実である。彼らは、ペルシアの「幾つかの場所でコレラがその巣を作り」ロシア領土での感染拡大の恐れがある、という非常事態の下で、全くの指導力の無能ぶりを発揮したのである。時を逸してしまい、犠牲者が不可避となった。

アレクサンドル三世は祖父のニコライ一世のようなカリスマ性を帯びてはいなかった。祖父の場合、一八三一年のコレラの六月と関連する伝説が形成された。ニコライ一世が〔ペテルブルグの貧民街と接する〕センナヤ広場に立ってアッピールを行なったという神話は、数多くの絵画や都市フォークロアで裏付けられた。コロナ・エピデミックが衰退したのは、ニコライ一世がこうして人民の面前に現われたおかげだ、という噂が出回った。ところが、ガッチナ宮殿の隠遁士〔アレクサンドル三世〕の方は人民とのコミュニケーションの必要を感じなかった。しかし、権力の名で行動するヴォルガ地方の県知

事たちは、棺桶の氾濫を事前に防ぐ措置を何一つ講じなかった。その無能力ぶりに対して勲章が授与された、ことになる。

注二三

「ここに現われているのは＞貴族の若様の県知事＜の無能さと＞愚劣さ＜さばかりなのだが」

本書の或る版でコロレンコは皮肉なニュアンスを削っている。すなわち、「貴族の若様の県知事」の代わりに「愚劣な県当局」に責任がある、としている。

注二四

「おかげで、この十年が平穏無事に過ぎた」

コロレンコのアーカイブズには、オスタシコフ県の貴族会長である四等文官ウトキンによって読み上げられた〔結婚祝賀の〕「挨拶の辞」の写しが保存されている。一月二三日、ウトキンは、ゼムストヴォ代議員の名の下に、皇帝に対して「パンと塩」を贈呈した。トヴェーリ県ゼムストヴォによるその「挨拶の辞」の日付は一八九四年一二月八日となっている（「ニージニー・ノーヴゴロド小新聞」Нижегородский Листок、一八九五年二月一〇日付参照）。コロレンコはこの記事を「モスクワ報知」Московские Ведомости（一月二三日付）から写し取った。この新聞記事を分析しながらコロレンコは一八九五年の二月の時期、日記にこう書いた。「どうやら、ツァーリの言葉に対しても検閲が行なわれているようだ」と。同時にコロレンコは自己の皮肉癖の好きなようにさせた。そこでは以下のくだりも含んでいた。「あるいは、哀れなトヴェーリ人たち〔ゼムストヴォ代議員〕は『同情を集めた』。侮辱されたあとに『耳をつんざくウラー〔万歳〕』を叫んだので」。

注二五

「出席者は互いに顔を見合わせた、果たしてロシアのツァーリは自身の臣民の飢餓とコレラと一揆と死刑とを本当に平穏無事な出来事だと思っているのだろうか、と」

コロレンコの考えでは、こうした類いの出来事の後では、「父なるツァーリ」の声明によってその正確な意味づけが為されなければならなかった。なぜなら、この事態は内政に影響を及ぼし得ることで、地方生活においてツァーリのそうした声明は反動勢力が繁盛するための薬草エキスになりえたからである。「行政側はこの声明によって活気づけられた。法と地方自治への攻撃を強めたのである」。そして反動の動きは「自らの論理的帰結」の極（きわ）みに達した。コロレンコはただこう確認するしかなかった。「ツァーリは、官僚と貴族の寡頭支配者とに操られている」と。

注二六

「そして皆、気づいたのである、人民の災厄がツァーリの耳には届いていないことを」

コロレンコのこの教訓 сентенции には、「王様と鷹と鳩」というインド神話の余響が感じられる。「誰でも私の言うことを聞く者は祝福されるだろう」と天の神インドラは語った。「ちっぽけな小さな鳩〔実はインドラの化身〕」に対して、王様は「約束を守ること、誓約に忠実であること」を裏切らなかった。このことは、ツァーリが「私は専制の原理を守るであろう」という〔人民との〕約束に忠実であることの証明となる。この誓約を守らなかった場合、「誰でも」その不誓約を言明する者は「二度、祝福されんことを」。コロレンコはごく普通の人々へのアッピール апелляция〔『ツァーリ権力の瓦解』本文〕の中で、人々が理解できる形で、ツァーリの声明のみならず、活動の意義をも明らかにした。自らを「貴族と官僚のみの」ツァーリとみなしている、そういうツァーリについて、であるが。聖書に詳しいコロレンコは自己のスピーチ речь〔『ツァーリ権力の瓦解』本文〕の中で『列王記略上』（第一二章、三～一〇）を巧みに引用しているが、それは「道徳の問題」と「最高権力と人民との相互関係の問題」との理解に資するためであった。

注二七

ニコライ二世（一八六八年生、在位一八九六～一九一八年）は最後のロシア皇帝、軍最高司令官。

注二八

アレクサンドラ・フョードロヴナ（一八六八～一九一八年）はロシア皇后、ニコライ二世の妻。

注二九

ヴォロンツォフ＝ダシコフ、イラリオン・イヴァノヴィチ〔姓、名、父称〕（一八三七～一九一六年）は伯爵、騎兵大将、侍従武官長。「聖なる親衛隊」Святая дружина を指揮した。ホドィンカ原の大惨事（一八九六年）の後、職を解かれた。

注三〇

ポベドノースツェフ、コンスタンチン・ペトローヴィチ〔姓、名、父称〕（一八二七～一九〇七年）は政治家、モスクワ国立大学民法講座主幹。大公らの神学教師 законоучитель であったが、その教え子の中には、未来の皇帝アレクサンドル三世もいた。宗務庁〔シノード〕の検察官を務め（一八八〇～一九〇五年）、コロレンコによれば「大審問官」であった。

その覚書『ポベドノースツェフとアスコチェンスキー〔一八一三～一八七九年、作家、ジャーナリスト〕』の中でコロレンコはこう書いている。――「ポベドノースツェフが死んだ。幾つかの凝った論文と死亡記事。露骨な御用新聞と隠然とした御用新聞と、この双方からの＞政府補助金拝受組の追悼スタイ

ル〈。そして、それ以外のすべてのロシアの新聞雑誌の側からのよそよそしく冷たい評価。こうした声が響く中、公式的ロシア教会の「大審問官」は墓場へと運ばれた。その名前はロシアの反動の最も暗い流れと結びついている」。

注三一

「決められた時刻に皆々、「パンと塩」を携えてツァーリの宮殿へ出向いた。心やさしき祝辞と期待の念を伝えるためである」

こうした雰囲気は多くの点で新聞雑誌が助長したのである。このことについてコロレンコは一八九五年の始まりの日記にこう記している。「メシチェルスキー公爵〔一八三九～一九一四年〕は〔新帝ニコライ二世の〕誠実さについて雑誌「市民」Гражданин に、スヴォーリン〔一八三四～一九一二年〕はその善良さについて新聞「新時代」Новое Время に書いた」と。

注三二

「ツァーリは興奮していて両手で帽子を握っていた。二十歩ほど歩むと立ち止まり、帽子の中を覗き見ながら弱弱しく話し出した。その中には、スピーチの書かれた紙っ切れが入っていたのだ」

この時のツァーリのスピーチは、メシチェルスキーの「市民」誌での発言のパトスと、スヴォーリンの「新時代」紙での特別な受容ぶりとを裏打ちしたでもあろうような内容のもので、コロレンコの期待はことごとく裏切られた。コロレンコはそこ〔日記〕の中で、ツァーリのスピーチの本当の作者は誰なのかについて、後になって現れた考察を紹介している。それは「ツァーリ父さん」Царь-батюшка への自己の信仰をせめて幾分なりとも保持しようと願っている集団 круги から出てきたものであった。しかし、その作者は実はポベドノースツェフだという指摘は、自己の臣民の面前で長広舌をふるった皇帝の責任問題を何ら帳消しにするものではなかった。

注三三

「だが、この温和な嘆願が「馬鹿げた幻想」と呼ばれてしまったのだ」 市民の期待の見通しのなさを決定づけたニコライ二世とその「馬鹿げた幻想」発言は、まもなく、文芸的意義を得た。アムフィテアートロフ〔一八六二～一九三八年、作家〕が新聞に発表したフェリエトン〔風刺的記事〕がそれである。その登場人物「ニカ＝ミルシャ」の風貌は容易に「これはニコライ二世が原型だ」と見て取れる。アムフィテアートロフのこの作品のなかに、コロレンコはルーシの新しいタイプの「謀反人」を見出した。合法的なロシアの新聞に載ったフェリエトンに含まれた「皇帝陛下への侮辱」は、歯止めがかからなかった。新聞はロシアの津々浦々へと郵送で配布された。コロレンコには、「ニカ＝ミルシャ」の形象の創作者は勇敢で不敵なものと思われた。

注三四

ホドィンカ原の大惨事

これは一八九六年〔旧暦五月一八日〕のモスクワでの出来事だった。ニコライ二世の戴冠式の時期、〔土砂採掘場の〕長い深溝（しんこう）　ров を埋めておかなかった行政当局の怠慢によって、数千人がその深溝に落ち込み潰（つぶ）された。一九一七年四月二八日、コロレンコは「ロシア報知」編集者のヴラジーミル・ロゼンベルグ〔一八六〇～一九三二年〕に宛ててこう書いている、「私は自分の原稿の中でいい加減なことを書いてしまったでしょうか。というのは、私の居る所では、ホドィンカの大惨事のあと、＞運営責任者らが勲章を貰った＜と語られたからです。このことは私にある種の疑念を抱かせています。私は誰が一体、運営責任者だったか覚えていません。当時、誰だったかが宮廷に呼ばれ、何でも＞転轍手（てんてつしゅ）＜ヴラソフスキーが処分を受けたとか。あなたの居るモスクワではこの経緯（いきさつ）はもっとよく知られているでしょう。私の原稿に必要な修正をして頂けたら有難（ありがた）いです」。

（二〇二四年三月二九日、擱筆（かくひつ））